オー・ヘンリー
翻訳：結城浩
原題：The Last Leaf

最後の一枚の葉（36）

「日よけをあげて。見たいの」ジョンジーはささやくように命じました。

スーはしぶしぶ従いました。

けれども、ああ、打ち付ける雨と激しい風が長い夜の間荒れ狂ったというのに、つたの葉が一枚、煉瓦の壁に残っておりました。それは、最後の一枚の葉でした。茎のつけねは深い緑で、ぎざぎざの

最後の一枚の葉（37）

オー・ヘンリー
翻訳：結城浩
原題：The Last Leaf

へりは黄色がかっておりました。その葉は勇敢にも地上二十フィートほどの高さの枝に残っているのでした。

「これが最後の一枚ね」ジョンジーが言いました。「昨晩のうちに散ると思っていたんだけど。風の音が聞こえていたのにね。でも今日、あの葉は散る。一緒に、私も死ぬ」

オー・ヘンリー
翻訳：結城浩
原題：The Last Leaf

最後の一枚の葉（38）

「ねえ、お願いだから」スーは疲れた顔を枕の方に近づけて言いました。「自分のことを考えないっていうなら、せめて私のことを考えて。私はどうしたらいいの？」

　でも、ジョンジーは答えませんでした。神秘に満ちた遠い旅立ちへの準備をしている魂こそ、この世で最も孤独なものなのです。死という幻想がジョンジーを強くと

最後の一枚の葉（39）

オー・ヘンリー
翻訳：結城浩
原題：The Last Leaf

らえるにつれ、友人や地上とのきずなは弱くなっていくようでした。

　昼が過ぎ、たそがれどきになっても、たった一枚残ったつたの葉は、壁をはう枝にしがみついておりました。やがて、夜が来るとともに北風が再び解き放たれる一方、雨は窓を打ち続け、低いオランダ風のひさしからは雨粒がぼたぼたと落ちていきました。

オー・ヘンリー
翻訳：結城浩
原題：The Last Leaf

最後の一枚の葉（40）

朝が来て明るくなると、ジョンジーは無慈悲にも、日よけを上げるようにと命じました。

つたの葉は、まだそこにありました。

ジョンジーは横になったまま、長いことその葉を見ていました。

つづく